

令和7年度 自己評価書

学校園名 附属特別支援学校

1 学校経営計画  
別紙のとおり。

2 自己評価

領域	重点目標・具体的取組	達成状況・成果と課題	評価	今後の改善方策	学校関係者評価を踏まえた今後の改善方策
学校運営	<p>◎【重点目標①】いじめ防止対策の充実（重大事態を生じさせない取り組みの推進） 未然防止および早期対応がとくに重要であるという認識のもと、日頃から全教職員がいじめに対する意識を高め、初期の段階からチームで迅速に対応していくとともに、些細なことでも管理職に報告連絡をする。いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、早期の情報共有とチームでの対応を進め、重大事態を生じさせない取り組みを進める。【数値目標：いじめの重大事態の発生 0回】</p> <p>◎【重点目標②】業務の効率化等による「働き方改革」の更なる推進 教員の業務の適正化と効率化を図るため、運営委員会を学校運営の中核機関として位置づけ、教員</p>	<p>◎14回の「いじめ防止対策委員会」（校長、副校長、主幹、4学部主任）を開催し、情報共有、対策を検討した。児童生徒を対象にした「いじめアンケート」を年2回実施した。全教員参加の対面型の「いじめ防止対策研修会」を7月に開催した（悉皆研修）。学校の「いじめ防止基本方針」を策定し、児童生徒のわかる形で校内に掲示した。保護者を対象に学校のいじめ対策についての評価アンケート結果では、9割以上の保護者から「よい」という評価を得た。【いじめの重大事態の発生 0回 数値目標達成】</p> <p>◎年間13回の「運営委員会」（校長、副校長、主幹、4主任）の決定事項を、教員会で報告・連絡するという流れをより一層進めた。教員会議は原則としてオンラインで行った。スクール・サ</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>「いじめ防止対策委員会」を月1回以上定期的に開催する。緊急時には臨時開催する。</li> <li>「いじめ防止基本方針」を策定し、年度当初に教職員と保護者に周知するとともに、児童生徒のわかる表記で校内の複数個所に掲示する。</li> <li>児童生徒を対象にした「いじめアンケート」を年2回実施し、いじめ又はいじめにつながる行動の早期発見に努める。</li> <li>保護者を対象に学校のいじめ対策についての評価アンケートを年度末に行う。</li> <li>全教員参加の対面型の「いじめ防止対策研修会」を開催する（悉皆研修）。</li> <li>「運営委員会」で審議決定して、教員会議で報告連絡するという流れを徹底する。「教員会議」は原則としてオンラインで短時間行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校関係者評価から、いじめ防止対策について、総合的に取り組まれていると高い評価を得た。来年度も本年度の取り組みを継続的かつ発展的に展開する。</li> <li>学校関係者評価から、「働き方改革」については、厳しい教職員体制、労働状況の中で、先生方がよく工夫されているという評価を得た。来年度も、正規または有期の教員をできるだけ確保するとともに、非常勤講師を積極的に活用して、教員の業務を軽減したい。また、ICT等を活用した効率的な校務の運用に努める。</li> </ul>

	<p>の校務を組織的に執行する。会議は対面、オンラインと使い分けて、効率的かつ効果的に実施する。すでに開始している学校と保護者とのオンラインでの配布物のやり取り等を適切に実施する。また、さらなる負担軽減を考慮して、他附属学校で導入済みのフルクラウド統合型校務支援システムを試験的に導入すること等を検討する。</p> <p>◎【重点目標③】性暴力、ハラスメント、体罰のない安全・安心な職場づくり 性暴力、ハラスメント、体罰は、違法行為であるのみならず、幼児・児童・生徒の心身に深刻な悪影響を与え、教員等及び学校への信頼を失墜させる行為であり、絶対に許されるものではない。すべての教職員がこのことを強く意識しながら教育活動や子供の指導・支援に取り組み、保護者と連携して、子供の人権が尊重される安全・安心な学校づくりに努める。【数値目標：幼児・児童・生徒への性暴力、ハラスメント、体罰 0回。】</p>	<p>ポート・スタッフ（SSS）を配置し、教務主幹の業務軽減を図ることができた。他附属学校で導入済みのフルクラウド統合型校務支援システムを令和8年度から導入予定である。なお、12月から、大学主導で勤務実態が大幅に変わり、教職調整手当から超過勤務手当方式へと変更された。年度内は試行期間として位置づけ、令和8年度より本格実施である。</p> <p>◎保護者や幼児児童生徒からの教員の指導や対応に関する性暴力、ハラスメント、体罰にかかわる相談はなかったが、引き続き、管理職を中心として徹底を図る。【幼児・児童・生徒への性暴力、ハラスメント、体罰 0回 数値目標達成】</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・SSSを効果的に活用し、教務主幹の業務軽減を図る</li> <li>・フルクラウド統合型校務支援システムを有効に活用する。</li> <li>・副校長を中心として、出退勤時刻と超過勤務の把握し、定時退勤に努めるようにする。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の指導や対応に関する性暴力、ハラスメント、体罰が生じない学校環境づくりを行う。</li> </ul>	
教育活動	<p>○大学の講座やセンター等と連携した最先端の教育 特別支援科学講座、特別支援教育教育臨床サポートセンター等と連携して、最新の研究知見に基づいて、ICTを活用するなどして、授業デザイン、教材開発、実践、評価等のサイクルを通し、授業づく</p>	<p>○特別支援科学講座と特別支援教育・教育臨床サポートセンターの教員、本学の保健体育、理科、インキュベーションセンター等の教員、他大学の特別支援教育に関心のある大学教員と連携し、授業改善や研究推進に取り組んだ。教育・研究で本校を訪問した大学教員は、のべで年間100名を超えた。また、介護等体験や教</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別支援科学講座と特別支援教育・教育臨床サポートセンターの教員、本学の特別支援教育を専門としない教員、他大学の教員と連携した教育をさらに進める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校関係者評価から、4学部が設置されている学校の特色を生かした教育活動が必要であるという評価を得た。来年度は今年度以上に学部間の系統性を明確にした教育活動を展開</li> </ul>

	<p>りとその改善を進める。</p> <p>◎【重点目標④】4学部が設置されている特別支援学校の特徴を生かす教育 幼稚部、小学部、中学部、高等部の4学部が設置されている知的障害特別支援学校は全国的にもきわめてまれであり、その特徴を生かして、各学部段階で求められる教育の在り方等について検討し、展開するとともに、学部間の連続性を意識した教育活動を展開する。</p>	<p>育実習を除いた学生の訪問は、のべで年間250名を超えた。多くの大学関係者と連携できた。</p> <p>○4つの学部間を貫く系統的教育活動は展開できなかったが、学部の壁を超えて、幼児児童生徒やその保護者に対して教職員のほとんどが、学校行事や日常場面において声掛け等を行うことができた。</p>		<p>・4学部全体の教育の系統性と考えるとともに、中学部と高等部という中等教育にまずは焦点をあて、教育課程、各教科等の目標・内容の連続性等を意識した教育活動に取り組む。</p>	<p>する。</p>
研究活動	<p>○特別支援科学講座、特別支援教育・教育臨床サポートセンターとの連携した研究 東京学芸大学特別支援科学講座、特別支援教育・教育臨床サポートセンター等との連携しながら、知的障害教育に関する最新の実践研究を推進する。</p> <p>◎【重点目標⑤】研究協議会を核とした研究の推進 昨年度まで進めてきた研究を継続・発展させて新たなテーマを設定して研究に取り組み、その成果を研究協議会(1月)で発表する。</p>	<p>○特別支援科学講座と特別支援教育・教育臨床サポートセンターの教員、本学の保健体育、理科、インキュベーションセンター等の教員、他大学の特別支援教育に関心のある大学教員と連携し、授業改善や研究推進に取り組んだ。教育・研究で本校を訪問した大学教員は、のべで年間100名を超えた。また、介護等体験や教育実習を除いた学生の訪問は、のべで年間250名を超えた。多くの大学関係者と連携できた。(再掲)</p> <p>◎「知的障害教育における探究的な学びの創造」という2年計画の新たなテーマで研究を進めた。各学部3、4名の特別支援科学講座と特別支援教育・教育臨床サポートセンターの教員が助言者として参加した。令和8年1月23日に開催した研究協議会では、参加者は全国から200名以上あった。参加者アンケートでは、「職場等で活かせる」と回答したも</p>	B	<p>・特別支援科学講座と特別支援教育・教育臨床サポートセンターの教員、本学の特別支援教育を専門としない教員、他大学の教員と連携した研究活動をさらに進める。</p> <p>・「知的障害教育における探究的な学びの創造」というテーマで、2年計画2年目の研究を、特別支援科学講座と特別支援教育・教育臨床サポートセンターの教員と連携して進める。1年目の研究を土台として、2年計画のまとめを意識した研究を遂行する。な</p>	<p>・学校関係者評価から、研究協議会の成功について高い評価を得た。来年度は、教員の過剰な負担が生じないように研究方法を検討しながら、「探究学習」に関する研究をさらに推進する。</p>

		のが全体の 98%ときわめて高い数値となった。		お、体育館改修が予定されていることから、全体講演等では成美教育会館を利用し、学校教室とのハイブリッドの施設利用で、協議会が円滑に進むよう工夫する。	
学生の教育・支援活動	<p>◎【重点目標⑥】「教員になりたい」意欲を高める学部教育実習の実施 選択実習（9月）、必修実習（2、3月）それぞれについて、学生のニーズに即した教育実習を工夫し、教員になりたいという意欲が高まるよう努める。</p> <p>○高度な専門性と実践性を育む教職大学院実習の実施 教職大学院特別支援教育高度化プログラムの実習生を受け入れ、実態把握、授業づくり、評価、学級経営、地域連携等、高度な専門性と実践性を育む実習を工夫する。</p> <p>○介護等体験の円滑な実施 コロナ禍以降実施されていなかった介護等体験の再開について、大学の担当部署と連携して円滑に対応する。</p>	<p>◎4年生19名を対象とした選択実習は9月に2週間、3年生25名を対象にした必修実習は2、3月に3週間実施された。いずれにおいても、中途辞退者なく全員が終了した。実習中は指導教員を中心にして実習生の勤務時間管理に努め、おおむね退勤時刻を守ることができた。事後レポートでは、教員になるにあたり有意義な実習であったという内容の意見が多数みられた。</p> <p>○特別支援教育高度化専攻の教職大学院生（修士2年）1名を受け入れて、専門性の高い実習を実施した。</p> <p>○コロナ禍以降実施されていなかった介護等体験が再開され、のべ1200人以上の学生を受け入れた。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育実習主事教諭を中心に、プレ実習をさらに充実される取り組みを整備する。例えば、大学から選択実習（9月）の名簿を早めに受け取り、早くから観察実習、プレ実習に参加できる体制を整える</li> <li>教育実習中は、実習生の出退勤時刻のさらなる管理に努め、すべての実習生が全実習日中8割以上の18時前退勤を目指す。</li> <li>令和8年度も1名の教職大学院生（修士1年）を受け入れが予定されており、引き続き、専門性の高い実習を実施する。</li> <li>介護等体験には、多くの保護者の支援を必要としており、また、休日の実施の場合、教員の休日出勤が必要となっている。教員養成を任務とする本学の唯一の附属特別支援学校として受け入れないわけにはいかないが、保護者の負担軽減と、教員の「働き</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校関係者評価から、充実した教育実習がなされているという評価を得た。引き続き、教員になる意欲を高める教育実習と、教員の「働き方改革」と両立する実習生指導を目指す。</li> </ul>

				方改革」との両立を目指す方法を検討する必要がある。	
社会貢献活動	<p>○教育実践や研究を通して得られた成果の発信 研究協議会、ネットフォーラム、本校ウェブサイト、日本特殊教育学会研究大会をはじめとする関連学会等で、知的障害教育及びその周辺領域に関する研究成果を広く全国に発信する。</p> <p>○地域支援や附属学校・園支援の実施（センター的機能） 特別支援学校のセンター的機能として、相談部（特別支援教育コーディネーター）が中心となり、保育園や東久留米市と連携した就学相談、地域の幼稚園の巡回相談、本学附属幼稚園に対する巡回相談等を系統的に実施する。</p> <p>○卒業生との交流 春のレクリエーション大会（5月）や学習発表会（2月）等を活用して、在校生が卒業生とかかわる機会を設け、生涯発達支援学校としての役割を果たす。</p>	<p>○令和7年7月29日に「教師の力量形成について」というテーマで、本学の平田先生、上越教育大学の村浦先生、長野県公立小学校の田中先生を講師に迎えて開催した。32名の外部参加者があり、一定の成果は得られた。</p> <p>○東久留米市の保育所等の就学前支援に加えて、本学附属学校・園の巡回支援、巡回相談を行った。それぞれののべの支援回数は、前者が37回、後者21回と、かなりの回数となった。特に、今年度から開始した附属学校・園支援は各校から高く評価されたため、さらなる充実が期待される。</p> <p>○春のレクリエーション大会（5月）、二十歳を祝う会（1月）、学習発表会（2月）等を活用して、在校生が卒業生とかかわる機会を設けることができた。一方で、落雷による停電で、若竹会（10月）等のいくつかの交流の機会は中止となった。</p>	B	<p>・ネットフォーラムの目的がいまいちになりつつあるので、次年度は学区域の小中学校の特別支援学級教員をメインターゲットにした研修会に変更し、講師も本学教員と大学教員から選び、本校への関心をもってもらうような会にする会にする。</p> <p>○本学附属学校園の巡回相談や支援の評価が高いため、運営部と連携して充実させる取り組みを検討する。</p> <p>○「働き方改革」を視野に入れつつ、若竹会（同窓会）と連携して、春のレクリエーション大会（5月）、若竹会（10月）二十歳を祝う会（1月）、学習発表会（2月）などで積極的に交流を行う。</p>	<p>・学校関係者評価から、若竹会という卒業生とのつながりについて高い評価を得た。来年度は、教員の「働き方改革」と両立させることのできる社会貢献活動を検討し、可能な範囲で展開する。</p>

3 その他特記事項 なし

4 自己評価委員会委員，開催日

委員長 奥 住 秀 之

副委員長 中 村 昌 宏

委 員 井 上 剛 委 員 溝 江 有 里 子

委 員 柴 田 琢 磨 委 員 沼 澤 聡 子

委 員 沼 澤 聡 子 委 員 岩 本 悠 希

開催日 令和8年3月2日、令和8年3月19日